



自由主義の限界と部族主義の逆襲

—分断される世界と日本の選択—

上智大学国際関係研究所長 安野 正士

本日の講演のポイント

- ▶ 1) 今日われわれが直面している自由主義的国際秩序の危機
 - a) 「法の支配に基づく国際秩序」への権威主義大国の挑戦
 - b) 西側の民主主義諸国における国内政治上の分断
 - 「自由主義の限界」「部族主義の逆襲」の表れと解釈可能
- 2) 自由主義的国際秩序は古典的主権国家体制を自由主義の理念に従って改革したものだが、そこには主権国家体制と自由主義の間の矛盾をはじめ、いくつもの弱点がある。
 - 冷戦期にはこうした弱点はうまくカバーされていたが、それが冷戦後に崩れたことを契機に秩序の安定が失われた。
- 3) 自由主義のみを基盤として安定した社会秩序を築くことはできない
 - 人間は部族的性質を持つため、個人の自由や権利も、そうした価値を尊重する部族（連合）の中で守っていくしかない

本日の話の流れ

1. 古典的主権国家体制の特徴
2. 自由主義とは
3. 自由主義的国際秩序とは
4. 自由主義的国際秩序の弱点
5. 戦間期の国際関係の自由主義的改革の試み
6. 冷戦期の自由主義的国際秩序
7. 冷戦後の国際秩序
8. 望ましい国際秩序のあり方とは



1. 「古典的」主権国家体制の特徴

- ▶ 普遍的帝国から主権国家体制へ
- ▶ 領域内で排他的支配権を主張する主権国家が、相互に支配権を承認し合うことで成立
- ▶ 「複数の正義」に基づく「脱正戦論的」秩序
- ▶ → 「部族」が平等の資格で共存・競合する体制
- ▶ 各国の主権と自由が最優先の価値
- ▶ → 戦争の頻発

2-1. 「自由主義」とは？

- ▶ 個人の基本的権利の擁護を通じて、個人の自由と尊厳を守ることを至上の原理とする思想的立場
- ▶ 宗教戦争や絶対主義国家の時代に、個人の自由（特に内心の自由）を国家権力や宗教組織による抑圧から守ろうとすることから出発
- ▶ 個人の自由と尊厳を守るために多面的な「制度戦略」を採用
 - ▶ 個人の法的平等
 - ▶ 政治と宗教の分離
 - ▶ 強制力の集中と中立化
 - ▶ 人間の動機の「合理化」
- ▶ 18世紀以降、啓蒙思想の普遍主義と結びつき、「全ての人の自由と権利は守られるべき」という原理的主張が行われるようになった

2-2. 主権国家体制と自由主義

- ▶ 自由主義は、個人の自由・自律を部族的組織の圧力から守ることが眼目で、基本的には反部族主義的な思想。
- ▶ しかし個人の自由の安定的保障は法秩序・主権国家に依存
- ▶ 当初は主権国家の枠内で改革を目指した。19世紀半ばまでには北米・西欧・中欧諸国の内政で立憲的自由主義が確立
- ▶ しかし19世紀の国際政治は古典的主権国家体制の論理で動く
- ▶ そして戦争（特に総力戦）は、徴兵、徴税、動員、財産接収、思想統制その他の形で個人の自由を脅かす
- ▶ →二つの世界大戦を契機に、国際関係の自由主義的改革の試み

3. 自由主義的国際秩序とは？

- ▶ 個人の自由と尊厳を確保するため、「民主主義（と自由）にとって安全な世界」を築く試み
- ▶ 自由主義の「制度戦略」を国際関係に適用

個人の法的平等

政治と宗教の分離

強制力の集中と中立化

人間の動機の「合理化」

→ 民族自決

→ 政治と宗教の分離

→ 国際法と国際組織による平和

→ 経済発展と相互依存による平和

→ 民主主義による平和

自由民主主義体制をとる諸国が集い、
国際法を尊重し、国際機関等を通じて結ばれ、
貿易、投資等の経済協力関係を築き、
それを通じて域内で個人の自由と尊厳を安定的に保障している状態

4. 自由主義的国際秩序の弱点

- ▶ 自由主義の「普遍性」という幻想
 - 「個人の自由な選択にゆだねる」ことで失われる価値もある
 - 「自由主義」も国家的部族主義の論理に取り込まれうる
- ▶ 強制力の役割の軽視
 - 民主主義が世界に広まれば強制力に頼らずに済むはず
 - 強制力の動員における弱点
- ▶ 市場のガバナンスにまつわる問題
 - 市場は資源の効率的配分と技術・制度の革新を促す強力な装置だが、富の著しい偏在や経済的な不安定をもたらす
- ▶ 主権国家体制と自由主義の矛盾
 - 主権国家体制は国内体制を問わないが、自由主義によれば権威主義国家は正統性をもたない
 - 普遍主義的自由主義によれば、国境の存在自体が差別的とみなされうる

5. 戦間期の（萌芽的）自由主義的国際秩序

- ▶ 「ウィルソンの14か条」 → 国際関係の自由主義的改革の提案
 - ▶ 民族自決 ← 各国の法的平等
 - ▶ 公開外交 ← 外交の民主的統制
 - ▶ 経済的障壁の除去と貿易条件の平等 ← 経済発展と相互依存を通じた平和
 - ▶ 国際法の順守、国際連盟の設立 ← 国際法と国際組織を通じた平和
- ▶ なぜ失敗したか
 - ▶ 秩序の基本理念をめぐる争い（自由主義、共産主義、ファシズム）
 - ▶ 民族自決原則の選択的適用 ← 左からは「帝国主義」批判
← 右からは「持たざる国」論
 - ▶ 秩序を支える強制力の弱さ ← 米国の孤立主義の伝統

6. 第二次大戦後の自由主義的国際秩序

- ▶ 冷戦構造の中で、西側先進国を中心とする国際社会の「部分秩序」として成立
 - ← 普遍主義的拡大の抑制
- ▶ 脱植民地化/人種差別撤廃への動き
 - ← 正統性の強化
- ▶ ナチスの脅威、真珠湾攻撃、ソ連の脅威で米国が孤立主義脱却
 - ← 強制力の裏付け
- ▶ 「敵」に対抗する強制力（現実主義）と「味方」をまとめる国際組織（リベラリズム）の要素が合体（security co-binding）
- ▶ 市場経済のダイナミズムを取り入れつつ国内社会の安定を図る
- ▶ 主権国家・国民国家の正統性は傷ついたものの、国家主権と個人の自由の間に一定のバランスが保たれた

7-1. 冷戦後の自由主義的国際秩序

民主主義・市場経済の拡大とその帰結

- ▶ 中国の経済改革、ソ連型社会主義の崩壊
 - 西側の自由民主主義、市場経済を拡大する動き
 - 自由主義の平和は、自由民主主義の拡大を通じた平和
 - 異なる体制との間で安定的平和を築く発想には乏しい
 - 民主化を広めようとする一方でNATOの拡大
 - ロシアの反発

7-2. 冷戦後の自由主義的国際秩序 主権国家・国民国家の揺らぎとその帰結

- ▶ 自由主義を国境を越えて普遍化しようとする動きが強まる
 - 経済的グローバル化の進展で、先進国の製造業が縮小、非大卒の「普通の人」の賃金の停滞
 - 普遍的人権、外国人に対する人権保障、移民の規模の増加
 - 「国民」という地位の希薄化
 - 白人非エリート層のエリート不信、「白人中心の部族的国家再興」
 - エリート層の脱国籍志向
 - 「どこでも族」の部族性、低学歴層に対する軽蔑
 - 人種・民族的その他の少数派の自己主張
- ▶ 主権国家、国民国家の枠が緩む一方、新たな形態の「部族主義」が叢生し、先進国の内政が不安定化

8-1. 望ましい国際秩序のあり方とは

—国内社会の安定—

- ▶ 望ましい国際秩序の第一条件は各国内の安定。そのためには、国境という制度が差別的・抑圧的なものではなく、安定した政治秩序を築くために必要なものであることを再認識する必要。
- ▶ 国内社会に存在する多様性は尊重する必要があるが、同時に国民の「部族的」統合にも関心を払う必要がある。国民という「部族」は人種、民族等に基づいて成立することもあるが、共通の言語と文化、政治的イデオロギー等に基づいて作ることもできる。重要なのは「物語」の共有
- ▶ 「部族」の枠組の安定のためには、極端な経済的格差をなくすとともに、国内の様々な集団が「部族」内で満足できる場所を見出さうような物語が語られる必要がある

8-2. 望ましい国際秩序のあり方とは —民主国家の連帯、権威主義諸国との共存—

- ▶ 民主主義国と友好国の連帯によって部分秩序としての自由主義的国際秩序を維持
- ▶ 文化的多様性に配慮し、「普遍的価値」の押し付けは慎む
- ▶ 力による現状変更に対してはこれを許さぬよう抑止と防衛を強化し、また国際社会の多数の支持を結集
- ▶ 但し国際社会における「法の支配」は不完全でしかありえないことに留意
- ▶ 権威主義諸国についてもその死活的利益については、日本及び同盟国の死活的利益と衝突しない限り尊重すべき
- ▶ 日本には、民主国家の連帯を説く一方で、欧米諸国に対して、自由主義、民主主義、人権の普遍性を過信することなく、世界の文化的多様性や地政学上の必要を考慮した現実的戦略をとるべきことを説く役割がある

参考文献

- ▶ 安野正士「自由主義的国際秩序—その思想的背景と危機」
納家政嗣・上智大学国際関係研究所編、『自由主義的国際秩序は崩壊
するのか—危機の原因と再生の条件』（勁草書房、2021年）
25-53頁 所収
- ▶ 安野正士「自由主義の限界と部族主義の逆襲—分断される世界と日本の選
択」
植木安弘・安野正士編、『専制国家の脅威と日本—分断の中の外交
・安全保障』（勁草書房、2023年11月刊行予定）所収
- ▶ ジョナサン・ハイト『社会はなぜ左と右に分かれるのか—対立を超えるため
の道徳心理学』（紀伊國屋書店、2014年）

「部族（主義）」とは？

- ▶ 「部族」とは「比較的明確な境界をもち、他の集団と競合する人間集団で、成員の同一化や忠誠の対象となるもの」
- ▶ 部族は元来厳しい自然環境、他集団との競争関係のなかで人間が生きていくために発達した集団で、集団としての生存、繁栄が目的
- ▶ 内集団と外集団を区別し、成員には忠誠を求め、裏切りは罰し、部族全体の生存・繁栄のために時には大きな犠牲を要求する
- ▶ 個人は部族に忠誠心を持ち、部族の一員としての自尊心を持ち、それを保つために行動し、また様々なイデオロギーを発達させる
- ▶ 血縁集団である必要はなく、家族、国民国家、企業、政党支持者、宗教信者、ファンクラブなど様々な集団が「部族」的行動様式を示しうる